

吾が地元の最澄と空海
～弘法大師が他宗に祀られる状況～

1. 吾が国仏教史に燦然と輝く代表的な二人

その1；最澄（伝教大師）と空海（弘法大師）の二人を取り上げ、掻い摘んで簡単に記述します。

――804年、遣唐使船で大国の唐（今の中国）を目指した若き頃の二人。桓武天皇から篤い信任を得たエリート僧最澄は天台の教えを学び、比叡山に天台宗を開いた。一方、無名の僧であった空海は、密教を学び高野山に真言宗を開いた。二人は切磋琢磨しながら新しい日本仏教の時代を切り開いた。

しかし、813年11月、最澄が「理趣釈経」の経文（『理趣経』の注釈書）の借用を申し出たが、空海は「文章修行ではなく実践修行によって得られる」との見解を示して拒絶し、以後相容れず交流は途絶えた。――

長い歴史を得て、今日を概観すれば、私達には、伝教大師最澄よりも弘法大師空海の方が知れ渡っている、大きな存在となっています。兄頼朝に疎まれて北国落ちの旅に出た源義経の貴種流離譚の物語に重なるような気がします。つまり、最澄は表街道のエリートコースをまっしぐら、頼朝に重なる……。一方の空海はもちろん優秀であったが、四国の辺地で難行・苦行の実践修行を通して頭角を表した処は義経と重なってくる。そんなイメージが庶民に親しみ感を増し、熱い・篤い信仰に繋がって来たものと思っています。

したがって、真言宗のお寺には当然ですが、他宗派においても空海（弘法大師）像を祀っております。

その2；別の視点から見てみます。最澄の興した比叡山（延暦寺）からは、円仁（慈覚大師）、浄土宗の開祖法然、浄土真宗の開祖親鸞、日蓮宗の開祖日蓮、臨済宗の開祖栄西、曹洞宗の開祖道元など多くの高僧が生まれて「日本仏教の母山」と称され、ここを舞台に難行の極みである千日回峰行が連綿と受け継がれています。一方、高野山からは空海に繋がる有名な僧は出現していないし、メジャー的千日回峰行なるものもありません。宗教的な意味合いではないが、感性的に対称性を感じます。

2. 他宗寺院に祀れている弘法大師像

その1；平清水の「千歳山平泉寺」は天台宗ですが、本堂の中に図-1のような弘法大師像を祀っております。

その2；また、岩波の天台宗「新福山石行寺」においても、本堂の中の最澄を祀る須弥壇に図-2のとおり弘法大師像をも祀っています。

その3；また、上桜田の曹洞宗「神瀧山耕源寺」においても、本堂内には図-3のとおり立派な弘法大師像を祀っています。

他寺院でも宗派を問わず多々あるのではないかと思います。



図-1



図-2



3. 仲良く

もう一つ紹介したいことがあります。図-4のとおり、平成27

(2015)年は、弘法大師空海が高野山を開創してから1200年の記念の年になりました。様々な行事を展開していますが、ライバルであった伝教大師・最澄が開いた比叡山延暦寺のトップ半田座主自ら高野山に向いて慶讃法要を行ったのです。天台宗延暦寺最高位の座主が真言宗の総本山金剛峯寺で法要を行うのは史上



図-3

初めてのことです。逆に、金剛峯寺が延暦寺を公式訪問した事例を知りたくネット等で調べているが、今の処見当らない。繰り返すが、平安時代、二人とも同時期に遣唐大使の一員として入唐し、密教を学び、一時、最澄は空海の弟子的存在になった時期もあったが、考え方の違いから断交し、以後、そのような状態が続いていた訳です。そして、現在において、過去の恩讐を乗り越えて、後世（後輩、子孫）が同じ舞台に並び大法要を営んだのです。それらからは、この世は娑婆の万事万端はいろいろな要素が交錯しているが、それを個人的・一方的な見方（独善）で物事の軽重・優劣を断じることは決して出来ない、という教えを学びます。

叡山時報 平成27年6月8日 月曜日

高野山開創1200年記念大法会

座主猊下を大導師に慶讃法要

両山の法灯の護持発展を願う

去る4月2日から5月21日にかけて、高野山金剛峯寺（高野山真言宗・中西啓賢管長）にて執り行われた「高野山開創1200年記念大法会」。この一大勝縁を慶讃する天台宗法要が、5月19日、

歴史的な大法要を営む延暦寺僧侶

図-4

(end)